



公益財団法人
日本野鳥の会
Wild Bird Society of Japan

2018 年度

保護活動トピック

公益財団法人 日本野鳥の会は、2017 年より「インカトリッジ里帰りプロジェクト」を通じて、当会の保護活動へのご支援をいただいています。この報告書では、当会の 2018 年度の主要な保護活動の成果やトピック、また「里帰りプロジェクト」に関連した保護活動等についてご紹介します。

1

自然保護活動トピック

① 絶滅が懸念される野鳥の保護活動

絶滅危惧
IA類 (CR)

天然
記念物

シマフクロウ



2018 年度は、知床地域に次いで重要な生息地である根室地域の森 63.6ha と、国内生息地の南限で、今後、分布の拡大が予測される日高地域の森 6.1ha と 14.5ha を、そして複数の開発計画がもちあがっていた釧路地域の森 39.2ha を買い取り、野鳥保護区を新設・拡大しました。これで、当会のシマフクロウの野鳥保護区は総面積 1,047ha となり、現在、北海道で確認されている 70 つがいのうち 12 つがいの生息地の保全に寄与しています。



また、野鳥保護区内における保全活動では、日高地域の給餌場で、合計 180kg のヤマメの給餌を実施したほか、河川環境改善のための餌資源調査、設置した巣箱の巡回やメンテナンスを行ないました。



シマフクロウは、河川や湖沼周辺の森林に生息し、魚を食べる世界最大級のフクロウです。明治期までは北海道内に広く生息していたとされますが、繁殖に必要な大木が森林伐採等により喪失し、餌の魚類が河川改修などにより減少したことで数を減らし、絶滅の危機に瀕しています。現在は北海道東部から中部にかけて約 160 羽程度が生息するのみです。日本野鳥の会では、2004 年より生息地の民有林を買い取って独自の野鳥保護区としているほか、生息地となる森を育てる長期的な活動と、生簀による給餌や巣箱設置などの当面の絶滅を回避するための保護活動を行なっています。

準絶滅危惧
(NT)

オオジシギ



オオジシギは個体数の減少が懸念されるものの、過去と比較できるデータがなく、実情がわかりませんでした。そこで2018年度は、日豪の保護関係者と地域の小学生親子を含む調査チームや当会会員など計169名の協力を得て、主要な繁殖地である北海道全域で個体数調査を行いました。その結果、道内の総個体数は約3万5千羽と初めて推定できました。本州以南についても、当会50支部の過去20年分の繁殖記録と、46都府県のレッドリスト・レッドデータブックのカテゴリーランクの変化を調査して、本州での繁殖状況は危機的であり、特に本州中部以西で繁殖地の消失が激しいことを明らかにしました。今後は、この調査結果を元に状況の変化を確認し、保護の対策を立てていきます。

オオジシギは、北海道を主な繁殖地とし、本州や九州、またロシア極東の一部でも繁殖が確認されているシギの仲間です。秋から冬にかけて南半球のオーストラリアで越冬します。体長は約30cm、体重は170gほどで、ハトより一回り小さい程度の大きさです。日本野鳥の会では、2016年から、明らかになっていないことの多いオオジシギの生態について調査を行い、その結果をもちいて普及活動や生息地の保全を進めています。

絶滅危惧
II類 (VU)天然
記念物

カンムリウミスズメ



繁殖環境の悪化を改善するため、2010年より静岡県下田市の神子元島に人工巣を設置し、保護増殖に取り組んでいます。2016年には世界初の繁殖に成功し、そのデータを集積して人工巣の改良を重ね、2019年2月、初めて神子元島以外の繁殖地、福岡県の鳥帽子島に人工巣を設置しました。

また、謎の多い非繁殖期の洋上移動経路を解明するため、2017年4月から神子元島・祇苗島（東京都神津島村）の11個体を捕獲し1.5gのジオロケータ（照度や時刻等の記録機器）を取り付け、追跡調査を行っています。2018年4月、11個のジオロケータのうち2個の回収に成功し、解析の結果、神子元島の個体はオホーツク海や北海道まで北上していることがわかりました。また、他の研究者との連携を進め、他地域についても情報交換を行っています。伊豆諸島の個体の移動経路が判明したのは初めてで、繁殖地がある地域ごとに移動経路が異なる可能性が示唆されました。

カンムリウミスズメは、日本近海にのみ生息する小さな海鳥です。推定個体数は5千～1万羽程度で、環境省により絶滅危惧種に指定されています。一年のほとんどを日本周辺の海で暮らし、繁殖期にだけ無人島等に上陸し、岩の亀裂や隙間等を利用して巣を構えます。しかし繁殖環境の悪化により、カンムリウミスズメの個体数は減少しています。日本野鳥の会では、2009年から、伊豆諸島周辺を中心に、カンムリウミスズメの保護活動に取り組んでいます。最大の繁殖地である宮崎県枇榔島以外に1,000羽以上の規模の繁殖地を確保することを目標に活動を行っています。

絶滅危惧
I B類 (EN)天 然
記 念 物

アカコッコ



伊豆諸島三宅島の方言で「アカッパラ」と呼ばれ、身近な鳥として島民に親しまれてきたツグミの仲間、アカコッコ。希少な日本固有の種ですが、島外から持ち込まれたイタチによる捕食や2000年の噴火の影響で生息数が急減している、絶滅危惧種です。1993年から三宅島にレンジャーを配置していた当会は、このような危機的状況をうけて、2012年から主に繁殖期を中心に、生態調査と生育環境改善のための森づくりに取り組んできました。さらに保護活動を拡大していくため、2016年には非繁殖期の利用地域の調査を開始しました。ジオロケータの故障による調査失敗を経て、2018年度には、ついに小型GPSタグを付けた2個体から通年GPSデータを回収することに成功して、世界で初めてアカコッコの周年利用地域を把握しました。解析の結果、この2個体はまったく島から出ておらず、想像以上に行動範囲が狭いことが判明しました。今後の調査でさらに例数を増やし、通年の行動を明らかにして、保護に役立てていきます。

アカコッコは、伊豆諸島とトカラ列島でのみ繁殖する日本固有のツグミの仲間です。伊豆諸島では、大島から青ヶ島にかけて生息し、北部より南部の島で多く見られます。三宅島は本種の代表的な生息地で、三宅村の鳥にも選定されています。自然林から二次林までのさまざまな環境で暮らし、中でも照葉樹林の低木層があまり発達していない場所で多くみられます。また、林のふちで餌を探し、主にミミズやムカデ、昆虫類などを食べています。子育ての時期は4月から7月にかけてで、木の根や草の茎、コケなどを土で固めたお椀状の巣を樹上に作ります。卵の数は2～5個で、雌雄共同で雛を育てます。

2 自然エネルギーの導入と野鳥の共存を目指す活動

近年、地球温暖化対策の一つとして、太陽光発電や風力発電といった、自然エネルギーの導入が世界的に推進されており、当会も賛同しています。しかし、大規模な発電施設の建設により、森林伐採や鳥類の生息地の消失・減少、風車に鳥が衝突死するバードストライク問題など、自然環境への様々な影響が報告されるようになりました。そこで当会は、エネルギー問題の解決と自然環境の保全との両立を目指して、開発計画への提言や計画見直しを求める取り組みを行っています。

2018年度の風力発電、太陽光発電施設建設への主要望書・意見書

- ・北方四島における風力発電の導入に関して、要望書を提出
- ・太陽光発電施設建設における環境影響評価等の法制度の整備他について、環境省に要望書を提出
- ・「(仮称)五島市沖洋上風力発電事業 環境影響評価書」など、全国の風力発電計画に対して、意見書を提出

2

里帰りプロジェクトに関連した活動

日本野鳥の会では、身近な渡り鳥のツバメが近年減少傾向にあることを懸念して、2012 年からツバメを守るための取り組みを行なっています。昨年度は以下の取り組みを継続して実施しました。

1 ツバメの小冊子「あなたもツバメ子育て応援団」の無料配布



より多くの方に、ツバメのおかれている現状や生態を知ってもらい、ツバメの子育てを見守ってもらうため、昨年「里帰りプロジェクト」を通じてのご寄付で、小冊子「あなたもツバメ子育て応援団」の改訂版を制作しました。2018 年度も、お申込みのあった個人、団体 1,509 件に配布しました。

そのうち、愛知県春日井市内の 6 つの小学校には、合計 455 冊をお送りし「ツバメの巣」カウント調査の事前学習等に役立てていただきました。各校からは「写真が豊富でとてもわかりやすい」「ツバメのことがとても良く理解できた」などの嬉しいお声をいただきました。

2 ツバメ全国調査 2018「ツバメの子育て状況調査」を実施



「ツバメの子育て状況調査」は、当会が運営する専用ウェブサイトを通じて、身近なツバメの巣から何羽のヒナが巣立ったか、どのような原因で失敗したか等の情報を広く集めて、ツバメを取り巻く環境の改善に役立てる取り組みです。昨年度は、全国で 542 人の方に 1,041 巣を登録していただき、ツバメの子育て情報をお寄せいただきました。

市内の自然環境のバロメーターとしてツバメに注目し「ツバメ情報調査」を実施している神奈川県大和市では、市民が行なった観察の記録や集計に、この専用ウェブサイトを利用いただいています。

以上